## 編集後記

世間では土木というと，なんとなく粗野な肉体労働的なものを想像するようである。このためか，土木を別な名称に変えては，という提案をしばしば耳にする。たしかに現代の土木の範囲は土と木ではなく，コンクリート，鉄，アスファルト，さらにはバクテリヤまで入ってくる。これらを総称した名前はなかなかむずかしいが，土木というとそのものずばりという気がしないでもない所が妙である。しかし，最近では世間の認識も次第に高まって来たのであろうか，入試の成績でも土木は，工学部の中でよい方になってきた。土木という名前の認識が普及し，抵抗を感じないで受けとられるようになればそれでよいであろうし，またそのようにしたいと思うのである。

最近の土木工事は非常に大規模なものが多くなってきた。それに附随して新しい理論，工法も多く見るようになった。全く日進月歩といった所で，うかうかすると土木技術者として失格しかねないような感じすらするのである。

とかく学会誌と現場とが疎遠であるような声も耳にするのであるが，今回も工事報告に関するものがなかったのは残念に思われる。

大分煮付まってきた様子の本州四国の連絡橋について，新聞で大きくとり上げられたが，土木学会誌としても大きな問題で，いろいろなさしさわりはあるとは存じましたが，できる限りということでご承諾いただいたのは誠に有りがたく存じます。多くの資料が提出されるであろうことを期待しております。

運賃値上げ頃からさかんにＰＲ用のポスター等が見られますが，国鉄第三次長期計画について執筆をお願いしました。どのようになるものか興味深いものがあると思います。

北海道の学会には616編という膨大な発表原稿が集まり，土木学会がいかに膨張して来たかがうかがえる。このままで行けば今後の学術講演会のあり方にも再検討をせまられている状態である。学問の発展にともない細分化されて行くのは当然のことであるが，土木の分化は最近とくにいちじるしく，専門分科の範囲しかよくわからない状態である。本号の開発原論，交通需要の基礎的な報文，海浜の地理学的考察等，ちがった観点からの土木もまた興味があるものと思われる。

［徳光善治・記］


土木学会
創立50周年記念出版

**日本の土木技術**

— 100 年の発展のあゆみ —

日本の土木技術編集委員会編

〝日本の土木技術〟は土木各分野の専門家約 70 名が，それぞれの分野における発達史を概説したもの。土木技術と国土の開発・水の利用と水との戦い・交通路の整備・都市の建設・材料の進歩と構造技術の進展・基礎技術の進歩の6章に大分類され，さらにその中で，たとえば河川工事とか堤防，あるいは道路・港湾・ダムなどと小分類されている。章末の基本的な参考文献と索引，および明治元年から今日にいたる日本の土木技術年表は，この本を利用する一般の人びとにかなり便利なものになろう。

と岩波書店刊「科学」の書評欄にとり上げられた本書は，土木技術にその毎日の生命をかけている者全員の必読の書と考えられる。また，これから土木工学を学ぶ若き学生諸君には，ぜひ読んでもらいたい書でもある。

A 5 判　488 ページ
定価　1 200 円・送料　150 円

土木学会
創立50周年記念出版

**建設／創造／技術**

土木学会編／彰国社刊

戦後大きな発展をみたものの中に建設事業がある。

本書は土木学会創立 50 周年を記念して，土木学会が全国各地より集めた工事写真を中心として，これに論説，解説，工事リストを付した一大写真集である。

今日まで歩いてきた建設のあゆみを，特に大きく発展したここ 10 数年を中心にふりかえってみるのも決してむだではあるまい。ユニークで豪華なパノラマは書斉に飾るにふさわしい大作である。

A 4 判　280 ページ
定価　3 800 円・送料　200 円

土木学会
創立50周年記念出版

**土木学会誌 論文集総索引**

土木学会編

新らしい研究，設計，施工を始めるとき，どうしてもひもといてみなければならないものに過去の文献がある。

本書は土木学会創立 50 周年を記念して，土木学会が学会創設以来の文献（学会誌・論文集登載分）を整理分類し配列したものである。

技術者，研究者の座右の書として備えられることをおすすめする。なお本書は種々の関係で再版は不可能である。残部 200，お早くお求め願いたい。

B 5判　252 ページ
定価　800 円・送料　100 円